

特別会員寄稿

世界を旅して気がついたこと

作曲家 演奏家 笠松 泰洋

私は、2018年度の文化庁文化交流使という立場に選ばれた。これは、最低1ヶ月、最長1年、海外に行って文化発信をしてくる、というものである。その訪問国、内容等は任せられている。私は、エクアドル、アルゼンチン、チリ、ペルー、イギリス、オーストリアを訪問し、そこで各地の演奏家に自分の曲を演奏してもらうコンサートをするということにした。



ロンドン、グロブナーチャーチでの
笠松作品コンサート 2019. 1. 18

ウィーン以外では、私の弦楽四重奏の曲を中心にコンサートを行った。言葉も通じない国、初めての風土、初めて会う演奏家。そして、ほとんどの演奏家にとって初めての日本人の曲。私は自分の作品の中でも、和の要素が強いものを意識的に選んだ。文楽に基づく「ソネザキ」という曲と、能舞台をイメージした「幻能～雪・女」という曲が入っている。これらの曲を各国の音楽家と一緒にリハーサルして、コンサートを迎える。きっと国毎に、全く印象が違う演奏になるのだろう。そう期待していた。

予想とは違うお客様の反応だった。チリでも、ペルーでも、ロンドンでも、そこに在住する日本人のお客様は同じ感想を述べた。「チリの若い女性たちが、あれほど日本的な情緒を生み出せるなんて、驚きました。」「イギリス人の若者が、あれほど日本的な感じを深く出せるなんて、どれだけリハーサルをしたのですか？」等々。例えばチリの方が演奏すると、私の作った曲は、全く違った感じになる、という結果を私は期待していたが、結果は逆だった。

音楽とは言語に近い。共通のルールに基づき、楽譜という台本が書かれ、演奏家はそれを読み、演奏する。音楽のルールは明確であり、皆、同じ楽譜を同じように読む。それを演奏する技量は人によって様々である。

当然上手い、下手はある。一方、音楽には、それが表現する内容があり、それは人間の感情、感覚に基づく世界である。お客に伝わるのは、実はほとんどこちらの方なのだ。技量の差より、内容が切実に伝わるということの方がずっと重要なのだ。

今回実感したのは、音楽が表現する内容とは、環境、言語、文化の違いよりもっと根源的なことだ、という事実だった。不安、喜び、期待、驚き、悲しみ、諦め、希望……。そういったことは、人間が皆経験するものであり、演奏家が理解すると、それはそのまま音として表現される。人間が生きる仕組みに根ざした感情に、音楽の内容は立脚しているのだ。人種、言語の違いは、人間という生き物にとって本質的なものではなく、社会的な付帯状況に過ぎない。故にその差は音楽では問題にならないのだ。音楽が表す人間の状況が理解されれば、国籍、年齢、性別、民族性など一切関係なく、近松門左衛門の描いた男女の苦しみも、雪女と人間の男の恋の話も演奏出来るのだ。和の要素はメロディー、リズムに宿り、それはそれなりの技量があれば、誰でも出来ることだったのだ。



ウィーン、ダスオフシアターにてオペラ「人魚姫」
英語版初演のカーテンコール 2019. 3. 22

音楽は世界の共通語、という言い方の本当の意味は、音楽は人間が生きる仕組みに立脚しているから、その内容は世界共通だ、ということだったのだ。日本人でもバッハやショパンの素晴らしい演奏が出来る、ということでもある。音楽は、言語、政治、宗教、経済といった制度を超えて世界を繋ぐものなのだ。それなら、人生を賭けるに値するものだ。今回は、それを確信した旅となった。

笠松泰洋先生 文化交流使帰国報告会
日時 6月14日(金) 14:00～16:00
会場 中央公民館 3F 8・9号室